

発表要旨

【言語学系】

「教育と可視性」

クリス・タンクレディ（慶應義塾大学教授
：理論言語学）

研究はその人個人の活動でありうる。一般に認知されることは決して個人の活動ではない。日本の教育機関は研究を支援するが、一般に認知されるための支援はほとんど効果を持たない。可視性を達成することに関してはチームとしての努力が必要である。良い研究を生み出す研究者を育てることが第一である。その一方で、その研究が一流の学術誌に発表され、引用されることも同じくらい大切である。この二つを達成するためにそれぞれ以下の方法がある。一つは、教育システムを改善することによって研究の質を改善すること。もう一つは、採用プロセスをある程度制御することである。最も効果的なのは、これら両方を行うことであろう。

「日本語学と国際化」

木部暢子（日本学術会議第一部会員・国立国語研究所教授
：日本語学）

日本語学は、日本語の書き言葉や話し言葉を対象とする学問分野で、日本語の文字資料や会話資料を研究データとしている。そのため、論文の読者は日本語がある程度、理解できるという前提で、研究者は研究論文を発表してきた。このことが起因して、海外への情報発信や海外の研究情報の受容が遅れたという事実は否定できない。現在、徐々に国際発信や国際学術交流が増加しつつあり、今後、さらに推進が求められるわけだが、それにも増して重要なのは、日本語資料の国際発信を進めることである。今後、世界の学術は多様性の維持を柱として展開すると考えられる。そのような中で、日本語資料を世界へ発信することは、大きな意義を持つ。そのために、データ・アーカイブの体制整備が必要であることは、言うまでもない。

「日本語研究の国際化—国立国語研究所の取り組み」

窪菌晴夫（日本学術会議連携会員・国立国語研究所教授
：言語学）

国立国語研究所が大学共同利用機関として実施している国際事業を紹介し、日本語研究のさらなる国際化のためにいくつか提案を行う。国立国語研究所は、優れた研究者の招聘、外来研究員や大学院生の受入、交流協定に基づく学術交流等の「国際交流」と、国際シンポジウムの開催、国際的な会議の誘致開催、海外での学術講習会の実施、海外の出版社との協定に基づく国際出版、優れた日本語研究の英訳・ウェブ公開等の「国際発信」を、2本の柱

として国際事業を展開している。日本語研究のさらなる国際化のためには、政府・研究機関（大学・研究所）・学会が協力して、若手研究者の育成、外国の言語研究者（特に若手研究者）への支援、研究者の自助努力を促す仕組みを強化していく必要がある。

「人文学の国際化と中国語」

平田昌司（日本学術会議連携会員
：中国語学）

2020年2月19日、中国の教育政策を主管する教育部が、トムソン・ロイターのSCI (Science Citation Index) 数値目標至上主義の打破を指示したことで、中国大陸の大学には激震が走った。3月3日には、人文社会科学分野でもトムソン・ロイターのSSCI (Social Sciences Citation Index)、中国独自開発のCSSCI (Chinese Social Sciences Citation Index) が神格化されていることを批判する大学教員の意見が新聞に掲載され、(1)数値目標ばかり気にして人文社会科学の初心を忘れている、(2)英語論文を過度に重視する「自己植民地化」の進行、(3)数十年を経た古い論文でも価値を持つ人文学の特質が短期の評価サイクルでは把握できない、(4)数値目標を達成しにくい研究分野を若い研究者が避ける、などの問題が生じた結果、中国の人文学が世俗化・功利主義化に陥っていると批判した。本報告では、米中の対抗関係も念頭に置きながら、人文学の国際化と使用言語の問題が、いまの中国大陸・台湾でどのように意識されているかを紹介してみたい。

【文学系】

「昆虫文学」、その底なしの魅力」

メアリー・A. ナイトン（青山学院大学文学部教授
：日米両文学）

20世紀前半、「昆虫少年」といえば、虫を採集し自然科学研究に夢中な男子を指した。現代でもノーベル賞候補者ジャン・アンリ・ファール(1823-1915)の代表作品『昆虫記』(*Souvenirs entomologiques*, 1879-1907)が途切れることなく出版されているため日本における昆虫博物館や昆虫文化の人気は絶大で、フランスに迫る勢いだ。同書は1922年にアナキストかつフェミニスト思想家である大杉栄が初めて翻訳して以来、古典文学では見られなかった近現代的な社会的問題意識と相俟って、「昆虫文学」を日本文学の一翼として確立した。本発表では一体どうして昆虫文学が今も底なしの魅力を放つのかを、具体例とともに探る。必ずしも昆虫文学を日本文学の一翼として主張するわけではない。むしろ昆虫文学というレンズを通すことによって、いかに文学が幅広く超領域に渡る国際学術交流に貢献するかという戦略を推進してみたいと思う。

「国文学者が英語で論文を書く日——国際化はなぜ必要なのか？」

沼野充義（日本学術会議連携会員・名古屋外国語大学副学長

：ロシア文学・ポーランド文学)

「国際化」の波は人文系にも及び、英語の授業を増やせとか、授業計画を英語でも記載せよ、といった圧力が強くなる一方である。その反面、日本語の位置づけは曖昧で、日本語で学術活動をするものの積極的な意味が見出しにくくなっている。また国際的な評価の際に日本語の業績は殆ど考慮に入れられていない。このような現状を踏まえ、(1) 国際化における英語と日本語の役割、(2) 日本人研究者の国際発信力強化の方法、(3) 異なった言語を専門とする文学研究者が専門・国を超えて議論できる共通の土台はどうしたら作れるのか、といった問題を考え、そもそも人文学の国際化はなぜ必要なのか、真の国際化とは何か、改めて考えてみたい。

「日英モダニズムの果実——福沢、野口、西脇——」

巽 孝之 (日本学術会議連携会員・慶應義塾大学教授)

：アメリカ文学&批評理論専攻)

近代日本の父・福沢諭吉は米国訪問後、何よりも翻訳によって近代的言説空間をもたらした。以後、福沢の学塾で学び 19 世紀末に渡米した野口米次郎は英語詩人として国際的令名を馳せ、その日本的詩想はエズラ・パウンドらイマジズムに影響を与える。野口に続き、20 世紀初頭に渡英した西脇順三郎は T. S. エリオットらのモダニズムを吸収し、その引用の詩学を日本語詩にも定着させる。かくも日英両言語が熾烈な相互交渉を演じた時代は他にない。その果実を再吟味してみたい。

“Concerning the Methods of Transcultural Academic Writing”

ロバート・キャンベル (国文学研究資料館館長)

：日本文学)

理系もそうであるように文系でもデータを積み上げ、分析を行って、一度冒頭で示した問いに解を出そうとする体の論文がほとんどである。にも拘わらず、日本語で書かれた優れた論文を英訳で読む時、仮にデータも分析も結論もそのまま正確に置き換えられたとしても、どこかしら違和感のようなものを覚えるのはなぜであろうか。もちろん、逆の場合も、多々ある。

「納得がいく」研究として良い印象を受けないのは、問いの立て方から事象への密着度、議論の運び方など様々な意味での「記述言語」運用能力とは一見異なるように見えるファクターが背景にありそうである。外国語、たとえば英語で論文を書く際に必要な運用能力とは、むしろそのような「言外」の思考や構成感覚などが含まれているものだと考えるべきであろう。母語または日常に用いる言語以外の言葉を使って文系の学術論文を書くとはどのような行為なのか。ここでは、いくつかの角度から広い観点に立ち、問い直しを試みたいと考えている。